

教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力Ⅱ

— 児童・生徒の変容の見取りを通して —

広島大学附属東雲小・中学校

伊藤 公一・重本 優紀

Teacher competencies for each subject area so as to approach the inherent attractiveness of the subject

Hiroshima University Elementary and Junior High School, Shinonome

Koichi Ito and Yuki Shigemoto

Abstract: To determine teacher competencies for each subject area so as to approach the inherent attractiveness of the subject, we shared how each subject area is perceived regarding the "inherent attractiveness of the subject" and established a rubric. This facilitates grasping more objectively the achievement status of the goals. Additionally, by comparing and re-examining previous classroom practices, we explicitly indicated teacher competencies with greater validity. By sharing and discussing ideas beyond the framework of each subject area, we aimed to improve the content of each proposal and enhance the specificity of teacher competencies.

Keywords: inherent attractiveness of subjects, teacher competencies, rubric evaluation

Ⅰ 本年度の研究について

(1) 研究の経緯

広島大学附属東雲小学校・東雲中学校（以下、本校と略記）では、令和元年度から令和3年度まで「教科等本来の魅力と学びのつながり」を中心に、児童・生徒に「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を育むための学びを豊かにする授業を目指し、教員が協働して研究および授業実践を行い、深化させてきた。

その中で、教科等本来の魅力（教科等の本質）¹の具体を検討するとともに、教科等本来の魅力に迫る授業づくりを行ってきた。

令和4年度から、教科等本来の魅力に迫る授業づくりの視点を踏まえて、教師の資質能力を具体的に示すことを目的に研究を進め、本年度は2年目の取り組みである。

例えば Schön（2007）は、『省察的実践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考—』（柳沢ほか監訳）の中で、「有能な実践者は日々の実践の中で、適切な判断規準を言葉で説明できないまま、無数もの判断をおこなっており、規則や手続きの説明ができないまま、自分の技能を実演している。」と述べている。そこから、教師の資質能力を具体的に明らかにすることは、教師自身の暗黙的な行為を自覚

化することにつながり、自身の授業を省察的に捉えることにつながると考える。

また、授業づくりに関わる教師の資質能力の具体について授業実践を基に協議するために、各教科等で共通の枠組みを設定した。各教科等で共通の枠組みを設定することにより、教科等を越えた汎用的な視点や、教科等固有の視点を整理することができると考えた。

そこで、本校では授業研修において、これまで授業観察の視点として設定していた項目を基に、教師の資質能力を表1に示すような「授業構想力」「授業実践力」「授業分析・評価力」の3つの項目に分類した。

これら3つの項目を基に、各教科等で授業実践を通して、教師の資質能力の具体を挙げた。各教科等において明らかになった教師の資質能力を整理した結果、各教科等の枠組みを超えた汎用的な視点を抽出することができた。例えば、授業構想力では、「学習のつながり」や「興味関心の喚起」等、授業実践力では、「思考を深めるための支援」や「協働的な学びを生起させるための支援」等、授業分析・評価力では、「指導のフィードバック」や「形成的評価」等の視点を抽出することができた。

さらに、授業分析・評価力に着目すると、単元を貫く発

表1 東雲小学校・東雲中学校が捉える教師の資質能力

資質能力	資質能力の説明
授業構想力	○児童・生徒の実態や、学習内容を踏まえ、児童・生徒がさらに伸びるための目標を判断する視点（目標設定） ○教科等の本質を捉えて、素材を教材化する視点（教材研究）
授業実践力	○目標、児童・生徒の実態及び学習内容を考慮して授業を行う視点（価値付け、板書、ファシリテート、机間指導等）
授業分析・評価力	○児童・生徒の実態を分析・評価し、自身の実践を改善する視点 ○児童・生徒の実態を分析・評価し、児童・生徒に対する形成的評価を行う視点

問を関連させた振り返り（社会科）や、期間を置いての事後調査（理科）、活動後のワークシートへの気付きや思いの記載（生活科）、ポートフォリオとしての振り返り（図画工作・美術科）、単元前後の技能テスト（体育・保健体育科）、ICE ルーブリック（道徳科）等、多様な評価方法が用いられていた。各教科等で設定した教師の資質能力について、より汎用性をもたせるためには、多くの実践例と児童・生徒の変容に基づいた協議が必要であり、先述した内容を踏まえると、各教科等の特性に応じた評価方法を用いて、それらを見取る必要があるといえる。

児童・生徒の変容の見取りについては、各教科等において多様な手法が用いられており、各教科等の特性を踏まえながら、教師の資質能力をより具体的かつ妥当性があるものとして明示するために、見取りのプロセスについて共通の枠組みを設定する必要があるという認識に至った。

(2) 研究の目的

本年度の研究は、教師の資質能力の具体について授業実践を通して示し、児童・生徒の変容の見取りに基づいた協議を行うことで、教師の資質能力をより具体的かつ妥当性があるものとして実践例を蓄積していくことを目的とした。その際、「逆向き設計論」に基づいた授業づくりを行った。

Wiggins & Mctighe (2012) によれば、「逆向き設計論 (backward design)」は、求められている結果 (desired result) を明確にし (第1段階)、そのことを承認できる証拠を決定してから (第2段階)、学習経験と指導を計画する (第3段階) という3段階で構成されると述べている。また、「逆向き設計」の要素は、到達目標 (goal)、本質的な問い (essential question)、パフォーマンス評価や自己評価、さらに、フィードバックを重視した評価、すなわち形成的評価 (formative assessment) の要素も含まれる (名倉, 2022)。

表1に示す教師の資質能力を逆向き設計論と関連づけると、教師は授業を構想する上で、事前に本時の目標を達成した具体的な児童・生徒の姿や、児童・生徒の多様な考えを想定することが重要だと考える。また、想定した具体的な児童・生徒の姿を踏まえて、適切な目標を設定し、教科等の本質を捉えて、素材を教材化する必要がある (授業

構想力)。その際、想定した児童・生徒の多様な考えを踏まえた、具体的な手立てを構想することが、児童・生徒の学びを保障する上で重要だといえる。授業実践を行う際には、事前に想定した児童・生徒の具体的な姿と、実際の授業における児童・生徒の実態を踏まえながら、授業構想段階で設定した手立てを講じる必要がある (授業実践力)。授業を分析・評価する際には、事前に想定した具体的な児童・生徒の姿を踏まえ、質的・量的な児童・生徒の変容に基づいて授業を分析することが重要である。その際、児童・生徒や自身の授業実践へフィードバックしていく省察の実践家の振る舞いが求められるといえる (授業分析・評価力)。以上の事から、逆向き設計論に基づいた授業づくりを行うことにより、授業構想力、授業実践力、授業分析・評価力の3つの資質能力を、教師がより発揮し、有機的に連動させることが可能になると考えた。

(3) 研究の方法

研究を進めるにあたって、表2に示すような研究推進年間計画を設定した。

特に、教員の「連携協働」を意識したものにするため、小学校・中学校間の授業交流や、各教科等で設定した教師の資質能力に関する視点を教科等を越えて共有することに重点を置いて研修を進めた。

また、図1に示すようなプロセスを踏まえて、逆向き設計論に基づいた授業づくりを行い、各教科等で設定した教師の資質能力について協議を深めることとした。

(4) 研究の成果と課題

研究会当日の分科会において、授業構想力について52件、授業実践力について49件、授業分析・評価力について31件、また、授業構想力と授業実践力にまたがった内容、授業実践力と授業分析・構想力にまたがった内容としてそれぞれ1件ずつの事例を明示及び協議することができた。

表2 東雲小学校・東雲中学校研究推進計画

日程	内容	
4/4	小中全体会①	主題説明提案, 教科等の魅力について協議・意見交流
6/1	小中全体会②	逆向き設計論に基づいた具体的な授業構想例示
7/6, 7/7	中学校授業研修	小学校教員の中学校授業研修への参加
7/26	小中全体会③	中学校授業研修を踏まえた意見交流
8/24	小中全体会④	教科等の基本的な考え方の交流
10/26	小中全体会⑤	主題説明プレゼンテーション
11/18	東雲教育研究会	
11/29	小中全体会⑥	研究会分科会の振り返り交流, アンケートの考察
2/8	小中全体会⑦	1年間の研究のまとめ交流
3/21	小中全体会⑧	次年度の主題説明 (案) 提案, 今年度のまとめ

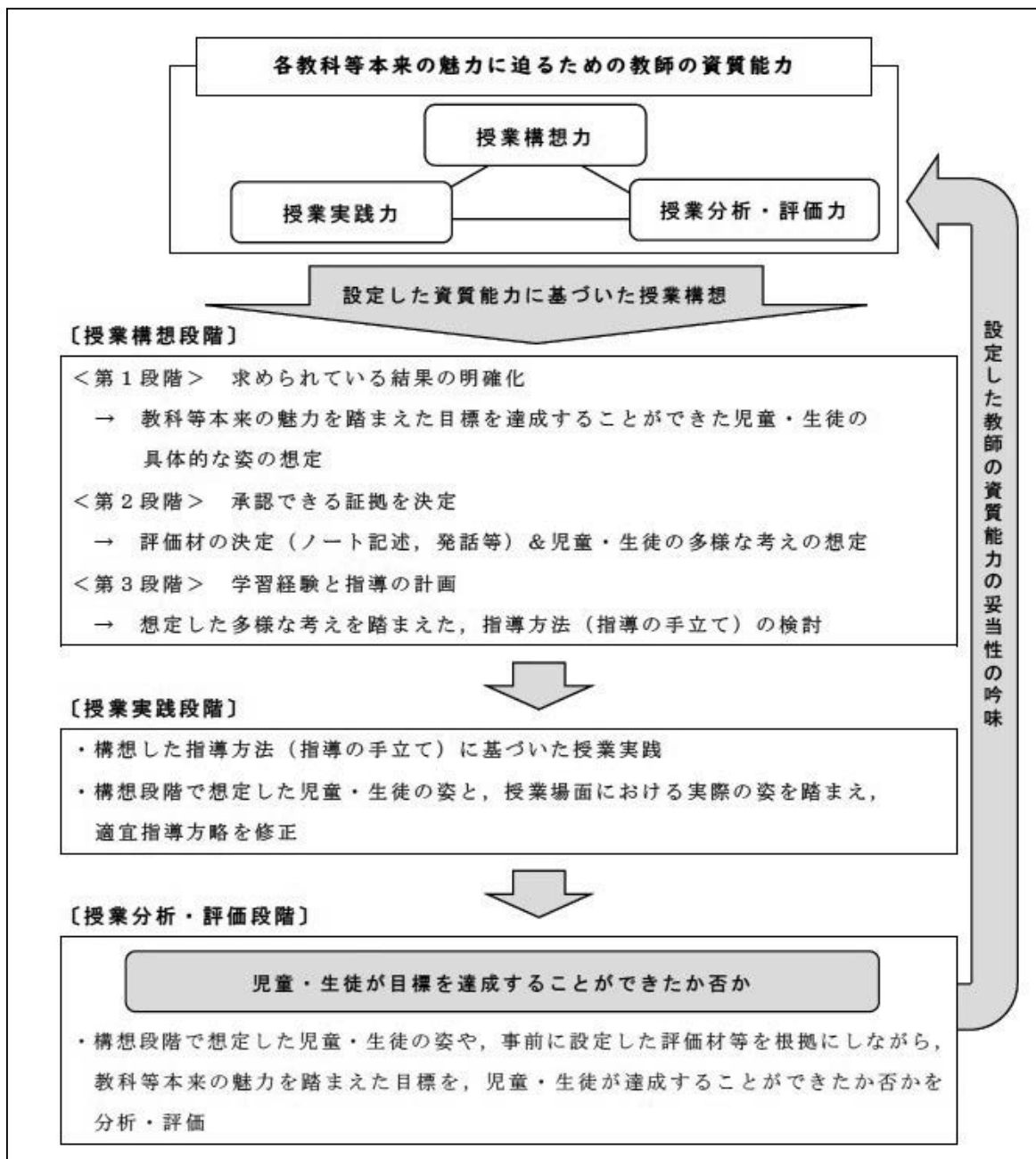


図1 逆向き設計に基づいた授業づくり

教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力について具体的な内容をいくつか挙げると、授業構想力に関しては、単元を通した児童・生徒の学びのつながりを踏まえて授業構想を行う視点が重要であること、言語活動の目的・場面・状況を具体的に設定し、活動の中で繰り返し確認することで児童・生徒の思考を促し、活動の必要性を引き出すことにつながることを、つけたい力を明確にした授業構想により、学習者が主体的に学習課題を設定することにつながることを明らかにすることができた。児童・生徒の多様な実態に合わせてやり方を変化させオーダーメイドの授業を構想する資質能力の必要性についても協議された。授業実践力に関しては、児童・生徒の実態を踏まえて、臨機応変に授業

展開を修正すること、児童・生徒が学習課題に向けてよりよく取り組んでいくために発問を精選する力、思考のつまずきに対的確に全体共有の時間を確保する力などを具体的に示す事例を挙げた。また、児童・生徒の見方や感じ方の幅を広げたりしていく授業実践の資質能力が求められていることがわかった。授業分析・評価力に関しては、評価基準を細分化することにより、スモールステップでの評価が可能となること、単元を通して変容を記述していく方法が児童・生徒の見取りをしやすいくこと、目標や手立てを焦点化、明確化することで、目標とする児童・生徒の姿をより具体的にもつことができ、言葉掛けや評価に生かせることなどを挙げた。

研究の成果として、ルーブリックを設定したことで、目標の達成状況をより客観的に把握することができたこと、前年度と今年度の単元を比較して再検討を行ったことにより、より妥当性のある教師の資質能力を明示することができたこと、児童・生徒のワークシート記述から、教師の資質能力を活用した効果を明らかにすることができたことなどが挙げられる。

研究の課題として、1時間の授業の中で児童・生徒の変容を見取り、授業へフィードバックしていく視点を新たに検討することで、授業分析・評価力を向上させると同時に、明示する教師の資質能力の汎用性や妥当性を高めることを継続して行っていくことが必要である。

また、逆向き設計に基づいた授業づくりをすることは、子供の思いとのずれが生じたり、教師が設定したゴールイメージに誘導してしまったりする可能性があるため、留意する必要がある。集団と個が関わる活動における個々の評価、多様な価値観が生まれる教科のもとでの評価、構想段階の評価の難しさ、また個別に評価を行う場合、人数分のルーブリックが必要となり、日々の実践を考えると現実的ではないなどの課題が挙がっており、ルーブリックのあり方をより柔軟に捉え直す必要性が出てきた。

今後の取り組みとして、目標設定や手立ての汎用性や妥当性をより高め、評価方法のあり方について検討していくことや、領域を広げて深く研究することを継続したい。

授業内・授業後の児童・生徒の姿を想定したルーブリックの評価項目設定を検討し、併せて学習活動・展開の再検討を行っていく。教科等本来の魅力に迫るため、実際に体験・体感して学ぶことで、より深く理解し、人生を豊かにする授業づくりを目指し、その実践成果を多くの教員と共有したい。

II 「越境」にかかわって

(1) 教科等本来の魅力を追求める研究について

学びの「越境」について、本校で取り組んでいる「教科等本来の魅力」を追求める授業づくりについて述べる。本校では、教科等における学ぶ意義や本質的な楽しさを感じられるようにするために、授業で学んだ知識・技能が日常生活で役立っていることを実感できるようにすることや、知的な発見や創造のおもしろさにふれることができることを重要視している。「教科等本来の魅力」を生かすための方法として、知識・技能が実生活で生かされている場面を設定することや、その領域の専門家が知を探求する過程を追体験できるよう、「教科等の本質」へ向かうプロセスを児童・生徒が経験する機会を設定することが挙げられる。本校ではこの授業づくりのための授業構想を「越境」と捉えて研究を進めている。

また、日々の授業交流の中で、教科横断型の授業づくり（例えば小学校算数での学びを中学校理科で応用する教材づくりなど）を提案する取り組みを進めている。

これらの研究を進める学びの土壌として、小学校の複式

教育、中学校の異学年集団の活動、特別支援学級と通常学級との交流など、「越境」と捉えることができる環境があり、そこでの児童・生徒、教師のあたたかい関係づくりが基盤としてあることを大事にしている。

(2) 本年度の研究と今後の取り組みについて

本年度は、研究推進計画においても「越境」の考え方を取り入れ、特に教員間の「連携協働」を意識して研究を進めた。まず、教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力を各教科等で設定するために、年度初めの研修会において、各教科等が「教科等本来の魅力」についてどのように捉えているかを共有した。共有を経て各教科等で設定した教師の資質能力を実践でどのように示すかについてプレゼンテーションし、その内容について協議した。これらの研修会では、各教科等の枠を越えて考え方を共有、協議することでそれぞれの提案内容をより向上させ、教師の資質能力の具体性を高めることを目指した。

また、研究会において本校の研究テーマに沿った協議を深めるために、中学校での授業研修を小学校教員と共有し、視点を共有する研修を取り入れた。

このように、教科等の枠を「越境」すること、小学校・中学校の枠を「越境」するような研修を取り入れることで、教員間の意識統一を図り、研究の方向性を共有し、それぞれの教科等での考えを深めていけるような研究を進めることができたと考える。

今後は、この研究体制を継続し、教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力の具体を質的、量的に増やして示し、本研究のまとめを行っていきたい。

註

- 1) 各教科等で固有の見方・考え方を働かせ、本質を視野に入れた質の高い学びを行うことが重要であり、本校では、教科等本来の魅力と教科等の本質は同義であると捉えている。

〔引用文献〕

- Donald A. Schön (2007) 「4 行為の中の省察」柳沢昌一、三輪建二監訳『省察的实践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考—』鳳書房、50-72.
- Grant Wiggins & Jay McTighe (2012) 「第1章 逆向き設計」西岡加名恵訳『理解をもたらすカリキュラム設計「逆向き設計」の理論と方法』日本標準、15-40.
- 石井英真 (2014) 「教員養成の高度化と教師の専門職像の再検討」『日本教師教育学会年報』第23巻、20-29.
- 石井英真 (2017) 「第1章 アクティブ・ラーニングを超える授業とは」『小学校発アクティブ・ラーニングを超える授業—質の高い学びのヴィジョン「教科する」授業—』日本標準、9-20.
- 名倉昌巳 (2022) 「パフォーマンス評価」『理論と実践をつなぐ 理科教育学研究の展開』東洋館出版社、240-245.
- 越智拓也 (2020) 「教師として生涯にわたって専門的に成長する(学び続ける教師)」磯崎哲夫編著『中等理科教育改訂版』協同出版、15-20.